

受容としての教父研究

教父著作を学ぶ時、われわれは、西歐世界成立以前のキリスト教に触れている。それは、ヨーロッパ文化史を経由せずに、直接に、キリスト教の源泉帯から水を汲む機会なのである。日本人研究者にとって、このことの意味は大きい。そこに湧き出る水をどのように飲めば良いのか。飲むでどうするのか。その水を飲んで、これからも欧米文明の後を走り続ければ良いのだろうか。そうは考えにくい。欧米の文化を再生産するだけのことなら、わざわざ教父の思想に立ち帰ることもあるまいから。また世界の友人達、とくにアジアの友人達は、われわれにもう少し創造的な文化貢献を期待しているであろうから。では教父学はどうあるべきか。教父研究が量質両面で高まりを見せている今日、教父達の遺産の受容ということが気になるのである。

柴田 有

文化の受容を考えるにあたり、先ず明治維新政府の文化政策を振り返っておきたい。その政策については様々な側面を指摘しうるであろう。が、明治国家の文化政策はそもそも意図がどうあったにせよ、主体的な判断なしに「欧米なるもの」に依存する風潮を生み出していった。その面を否定することはできない。単なる欧化政策と言うにとどまらず、「拝欧」と呼ばれるのはそのためである。かつて東京の日比谷にあった鹿鳴館は、そのような姿勢を指す代名詞として名高いが、設計を依頼された英人建築家は当初、日本の伝統的な建築様式の迎賓館を建造し、そこで外国人を接待するよう進言したと言う。しかしこの提言は当時の政府高官によって拒否される。積極的に欧米の文物を（キリスト教は別にして）取り入れるだけでなく、移入に際し

て己の文化を放棄する姿勢がここには認められる。これは今日に至るまでわれわれの手に残された宿題である。

しかし明治は拜欧一辺倒の時代でもなかった。欧米化という必然の流れのなかで、思考の自律を守ろうとした人々が居たのである。たとえば『文明論之概略』で福沢は、「議論の本位を定る事」について、こう説明している。城郭は守る者のためには利益となるが、攻める者のためには妨害となる。敵の得になることは、味方の損になるのである。したがって城郭の利害得失を論じるためには、「先ずそのためにする所」、つまり目的を定め、守りのためか攻めのためか、議論の本位を見抜かなければならない。ただ、それは見掛けほどたやすくはない。守りと攻めと、どちらも欠かせぬ情況のなかで、どちらを取るかという軽重の判断が伴うからである。外国との交際について利害得失を論じる場合にも、自分にとって何が重要であり、何が軽微であるかを判定することは難しい。それゆえ「利害得失を論じるはやす易しといえども、軽重是非を明にするは甚だかた難し」と言うのである。このように「本位」という言葉によって言論の拠り所とする基準を示す用語法は、ちょうど金本位制と言う時に、市場経済の仕組みのなかで金を最

終的基準にするのと同じである。

教父を学ぶに際しても、知識の「利害得失」を論じる前に、われわれにとって教父研究の本位とは何かを考えてみる。それに照らして利害得失が決まってくるような、大切な目的・基準、これが教父学の本位と言える。その問題をみずから突きつけて、こう答えてみよう。教父を研究することの本位は、日本の文化を豊かにすることだと。しかしそう答えてみると、われわれの行く手にはさらなる問題が潜伏していることに気付かされる。明治維新以来の文化政策と資本主義社会の急速な進展のなかで、日本の伝統文化などはとくに消滅してしまっているのではないか。それともどこかに伝統文化らしきものが生き続けているのか。農村を対象とする民俗調査を見れば、確かに周到な調査がなされ、豊富な資料が蓄積されている。各地の博物館や郷土資料館は、民俗知識の宝庫のようである。しかしそうした民俗や習慣は、現在ほとんど滅びつつあるのではないか。少くとも一面ではそう見える。日本の文化を豊かにすると言うが、その前提とする日本の文化をどう考えるのか、という問いが避けて通れないのである。どう考えればよいのか、悲観はしていないが、答えはまだ無い。